

平成28年度
第1回岩手県震災アーカイブシステム構築に係る有識者会議 議事録

1 日時：平成28年8月22日(月) 15時30分～17時00分

2 会場：県庁11階 労働委員会委員室

3 出席者

(1) 委員(敬称略、五十音順)

草野 悟	三陸DMOセンター 総括コーディネーター
工藤 昌代	(株)ホップス 代表取締役社長
齊藤 賢治	(一社) 大船渡津波伝承館 館長
柴山 明寛	東北大学 災害科学国際研究所 災害アーカイブ研究分野 准教授
◎南 正昭	岩手大学 地域防災研究センター長
◎委員長	

(2) 事務局

熊谷 正則	岩手県復興局復興推進課 総括課長
小野寺 重男	岩手県復興局復興推進課 特命課長
平野 達士	岩手県復興局復興推進課 主任
村上 洋平	岩手県復興局復興推進課 主事

(3) 委託業者

細川 剛志	凸版印刷(株) 東日本事業部第1営業本部第2部 部長
荒川 丈寿	凸版印刷(株) 東日本事業部BI本部 部長
細川 将	凸版印刷(株) 東日本事業部BI本部 係長
田中 淳子	(株)凸版グラフィックコミュニケーションズ 企画制作課 課長

4 会議次第

(1) 開 会

(2) 挨拶

(3) 委員長選任

(4) 議 事

1) 岩手県震災アーカイブシステム構築に係る有識者会議等の設置について

2) 岩手県震災アーカイブシステムの方向性について

ア 訴求ポイントについて

イ コンテンツ作成における時間軸の設定について

ウ システムの名称について

3) 今後のスケジュールについて

(5) 閉 会

資 料 一 覧

資料 1 岩手県震災アーカイブシステム構築に係る有識者会議等の設置について

資料 2 岩手県震災アーカイブシステムの方向性について

資料 3 岩手県震災アーカイブシステム構築に係る有識者会議等スケジュール

1 開 会

【小野寺復興推進課特命課長】

- 開会案内

2 挨拶

【熊谷復興推進課総括課長】

- 県では復興事業が本格化する中、震災から5年が経過した今年度を本格復興推進年と位置づけ、復興実施計画に掲げる各事業の推進に全力をあげていく。発災から復旧・復興の各過程の状況を後世にしっかり伝え、この教訓を今後起きうる国内外の災害の防災活動へ活かしていくことを目的に、新たに岩手県の震災アーカイブシステムを構築することとしている。開発するアーカイブシステムは単に資料を羅列・閲覧するだけでなく、今後の防災・教育・復興ツーリズムを使った交流人口の拡大にも寄与するものとして、構築したいと考えている。より訴求力のあるシステムを構築するため、この有識者会議を設置し、皆さまに議論、助言をいただきたい。委員の皆さまにはそれぞれ専門の立場から忌憚のない意見をいただき、東日本大震災津波からの復興の記録と教訓を後世にいかに伝えるかという視点から、震災アーカイブシステム構築に向けた会議にしていきたい。

【小野寺復興推進課特命課長】

- 委員6名中5名の出席により会議が成立する旨の報告。会議出席者の紹介。

3 委員長選任

- 同要綱第3条第3項により、委員長に南委員が選出された。

【南委員長】

- 震災アーカイブシステムの活用については、さまざまな形で県民に大きな影響を与えることかと思うので、皆さまの意見をいただきながら進めていきたい。

4 議 事

(1)岩手県震災アーカイブシステム構築に係る有識者会議等の設置について

【平野復興推進課主任】

- 有識者会議等の設置について、資料1を基に説明。今回はワーキンググループで議論を始めるに当たり、大枠についての確認の場とする。

(2)岩手県震災アーカイブシステムの方向性について

【平野復興推進課主任】

- 岩手県震災アーカイブシステムの方向性について、資料2を基に説明。

【柴山委員】

- 昨年度、震災津波関連資料収集活用の有識者会議に出席させていただいたが、その時に震災伝承施設との関係性について言及されていた。震災アーカイブで集めた内容は高田松原の震災津波伝承施設にデータが連携されると震災津波関連資料の収集・活用等に係るガイドラインには記載が

あったが、今回の資料の中に記載がないので高田松原の伝承施設との関連性を説明いただきたい。伝承施設の中でもゾーン設定をしており、その点での食い違いについてはどのように考えているのか。

【小野寺復興推進課特命課長】

- 現在、施設の細かい展示について設計を進めている段階のため、アーカイブシステムで収集するデータを具体的にどのような形で展示していくのかという点については、並行して検討していく。伝承施設の中でアーカイブシステムを検索できるような機能は入れたいと考えている。しかし、資料を伝承施設内で展示するかどうかは並行しながら検討していく。

【工藤委員】

- 伝承施設は、別で動いているのか。

【小野寺復興推進課特命課長】

- 国と県と陸前高田市の三者で、陸前高田市に震災津波復興記念公園の設置を計画しているが、その公園内に建設予定の「道の駅高田松原」の約半分のスペースを活用して伝承施設の整備を併せて計画している。アーカイブシステム構築と同時に、建物と展示施設の整備も進めている。

【草野委員】

- アーカイブシステム構築と陸前高田市の伝承施設の造作の一致を求めるとすれば、設計、施工業者が同じじゃないとリンクさせるのは難しい。沿岸の津波伝承施設は高田松原伝承施設ありきの印象が強いと感じたが、今後、各市町村が伝承施設を建設する可能性があり、その各施設に対しても十分にこのアーカイブシステムの活用はできるのではないか。

【小野寺復興推進課特命課長】

- 高田松原伝承施設の5つの展示ゾーニングも、今年の6月に基本計画をまとめる中で考え方を示しているが、ゾーニングと今回の6つの訴求ポイントは必ずしもリンクするものではない。津波の脅威や、震災・津波が起きた際にどのような行動をとらなければならないのかということ、来館者に伝えることが展示施設のメインテーマのため、目的に合わせたゾーニング設定をしている。アーカイブシステムは、どのような資料が残っているのか、どのような対応をしたのかということデジタルデータで示すもので、展示ゾーニングと訴求ポイントは必ずしも連携するとは考えていない。

【草野委員】

- 今後使いやすい引き出し機能として訴求ポイントをとらえてよいのか。

【小野寺復興推進課特命課長】

- そのように考えていただいて良い。

【齊藤委員】

- 2012年3月、岩手日報社が独自調査した資料で亡くなった方の避難動向をまとめたものがある。その中で、発災前の心構えができていなかったということから、約70%の人達がしっかり逃げれば助かったかもしれないと私は考えている。今回のシステムでは発災から始まっているが、発災の前に市民がどのように考えていたのかということが、大切なことではなかっただろうか。助かった方の多くは「まさか」という言葉を何度も言っている。犠牲者を出さないようにするためには震災の前にどのような心構えがあって、多くの犠牲者が出てしまったのかを考えるべきではないか。

【平野復興推進課主任】

- 「発災前・直後」と時間軸を設定している。震災において逃げ遅れた要素などを踏まえて、発災前

の各市町村のハザードマップや昭和三陸津波浸水時の資料などを収集していきたいと考えている。

【工藤委員】

- アーカイブシステムは伝承施設などに限らず、オープンデータのように情報を使いたい人が広く使えるものなのか。

【平野復興推進課主任】

- データはホームページで公開するという前提。

【柴山委員】

- 時間軸について、新潟県中越地震では3時間、3日後…というように設定している。ほかの災害と対応について比較する際、時間軸の設定が異なると比較対象にならない可能性が高い。5カ月で災害対策本部が廃止したという事実があるが、そこから「5」で区切るというのは必ずしも正しいものではないのではないか。災害への対応をしっかりとみていくためには、同じ時間軸で比較しないとアーカイブとして生きていかない。

【草野委員】

- 大学などから度々問い合わせがあるが、その際聞かれることは1年毎にどのように変わっていったのかということ。1、3、5という数字ではない。利用する方々に時系列で示すことができるためにも矛盾の生じないような定点監察は必要だと思う。
- 6つの訴求ポイントは、「頑張ったな」ということだけの印象。「最初は四苦八苦したが、1週間後このようにまとまった」というようなことがみんな知りたいことだと思う。自殺した方への自治体の対応やコミュニティにおける失敗事例など公開できないようなことも多々あると思うが、そんな中で成功した事例はこれというようなことを示すべきではないか。一般公開する際、傷つける人がでないような対処が必要だと思うが…。埋もれている資料の整理が大切だ。

【平野復興推進課主任】

- 物資については、アピオでの集中管理方式を採用したが、発災時は物資の管理方式を何も決めていないところからスタートだった。取り組みにおける背景を隠さずアーカイブを構築していこうと考えている。

【草野委員】

- 私たちが経験したことを次の地域の方々に活かしてもらえるのが、システムアーカイブの一番有効な使い方だと思う。

【南委員長】

- 震災は悲惨なことが多く連想されるが、6つの訴求ポイントは前向きでクリックしてみようかと思えるような言葉の選び方だと感じた。子どもたちが見た時にも前向きに見てもらえるようになってきていると思う。草野委員のご指摘通り、どのように乗り越えたかということを知りたいと思うので、どのように中に入れ込むかは工夫していただきたい。
- 訴求ポイントにおいて、個々人の主体的な取り組みが抜けているのではないかと感じる。「結いの力」で急に力が集まっているような印象がある。「支援から絆へ」は外部支援、「しなやかな対応」は行政サイドの視点、「結いの力」は住民たちの力を集めた取り組み、「個性」は福祉、性別の問題にクローズアップするような構成になっている。個人の主体的な取り組みは「結いの力」や「個性」のあたりに入ってくるのだろうか。そのあたりが文言として入っているといいのではないかと感じる。

【草野委員】

- 「結いの力」は「地域の力」ではないだろうか。

【工藤委員】

- ストーリー性をもったコンテンツの構成とはどのようなものか。ストーリー性とは時系列や立場などで、多目的に検索ができるシステムということか。

【草野委員】

- ストーリー性をもたせたらアーカイブではない。

【平野復興推進課主任】

- 一貫性のない資料をそのまま載せるだけでもアーカイブとして機能するが、この資料によって利用者に何を訴えたいのか、伝えるべきなのかという観点で考えた際に、この6つのポイントを設定した。一貫性のない資料を羅列するだけでなく、新たな視点を入れるということで、「震災前はこうだったが、震災を踏まえて今までの体制では機能しないことに気付いた。時間を経てこうなった」などを伝えられるよう、ストーリー性を設定した。

【草野委員】

- 利用者の設定はどのように考えているのか。

【平野復興推進課主任】

- 行政関係者、防災教育に携わる先生ほか、震災に興味のある人すべてを想定している。

【草野委員】

- 利用者のターゲットを明確にするといいのではないか。ユーザーの使い勝手が良ければこれから来る人に資料を組み合わせる提案できるようになると思う。震災の写真を見て、ただかわいそうだったという映像的資料にならないためにも、自衛隊のような専門集団が活用方法を分かりやすいようになればよい。

【南委員長】

- 網羅的な知識の羅列、主観を交えない、ストーリーを交えないのがアーカイブとしての一つの役割であるという考え方がある。一方で利用を促進したい、訴えたいことがあり、そのことを形にしていくと、網羅的なアーカイブからは離れて意図が入ったものになるということ。悩ましい部分ではあるが、どちらかという意図が入っていく方向になると思う。明確な意図ということではないが、区切りやポイントが入った分け方はあるのではないかと今回の提案だと思う。

【工藤委員】

- 片方だけでなく、データとして見たいという切り口とデータを串刺したものという、両建てで出せるといい。

【草野委員】

- 資料2の4「想定される資料の一例」について、区切りが先にあって、その先に各記録があるわけではない。それぞれの記録からリンクして引っ張り出すようにしたい。

【平野復興推進課主任】

- 資料をアーカイブで登録すると、検索のシステムでキーワード検索することができるので、探している資料を見つけることはできる。訴求ポイントは今回のメインとなるコンテンツ分けの提案であり、サブコンテンツについてはいろいろと検討していきたい。

【齊藤委員】

- 上から目線的な表記が多いように感じる。「こういうことがあり、こんな風に対策し、実行した」とあると思うが、それを受けて現場ではどうだったかということが問題だと思う。被災地の中にと不平不満はかなりあった。本来はそこを行政が汲み上げて、次への教訓にしていくべきだ。結果がどうであったかを検証して今後の教訓に活かせるようなアーカイブであってほしい。

【草野委員】

- 震災から5年が経過して気づくのは、防潮堤でも盛り土でも、賛否両論あり、震災に関することは後から考えることがほとんどだ。アーカイブというのは客観的に見て使うための資料であり、ここで結論をつけてしまうのはちょっと難しい。ただし、失敗事例は必要。検索で名前まで出てしまったら困ってしまうが。

【齊藤委員】

- いい話ばかり集めても仕方ない。次に伝えるべき教訓として失敗も伝えられればいい。

【工藤委員】

- Webでは、事実に対してさまざまな賛否の意見を見て自分で判断するということがある。意見を全部載せることも、掲載するものをセレクトすることも難しい面があるが、どこかで意見を投稿し、集約できる仕組みがあるというのもいい。

【草野委員】

- ケーススタディが多過ぎる。また、一方的なストーリーをもった記事にすることはできるが、そういうものは載せられない。沿岸部から県庁まで100km 離れている岩手県の特色は分断型被害だ。和歌山は岩手と海岸線が似ていて、近くに岩手は仙台、和歌山は大阪という都市があるという環境が似ている。そういったことから和歌山は岩手に学びたいと言っている。宮城県は平野での被害、福島は原発とそれぞれ被災状況が異なる中で、岩手のカラーをどこまでだせるのかということが大切。

【南委員長】

- 色を付けずに、いいことも悪いことも事実をしっかりと入れていくということが、アーカイブの基本として大切。それをまとめるときに、クリックするための分類が無色透明でも困るので、今回分類が設定してあるのだろう。準備いただいた分類は前向きな印象のもの。それをクリックすると、備えたけどうまくいかなかったなどというような事実や課題もたくさんでてくるという構成になると思う。前向きな期待をさせて失敗事例ばかり出るというのも、アーカイブの入り口としてどうなのか。

【柴山委員】

- ユーザーのレベルによって変わってくる。小学校の教員が使う、子どもたちが使うという時に現在の分類だとどこから入っていけばよいか解らないものもある。ユーザー視点で考えると6つのポイントでは足りない。もう少し多様性があるといいかもしれない。熊本地震で話題にでていたのが「時系列で次に何が問題になるのか」ということ。このままだと災害対応の問題点がどの期間に発生しているのかわからないので、そういったところが見えると今後の災害対応に役立つ。

【草野委員】

- 仮設住宅の返還など、現在も見通しがたっていない。こういう客観的事実を6つのポイントの中のどこに載せていくのか。

【柴山委員】

- 地域コミュニティの形成の部分載せるだけでなく、震災後により様々な理由によりコミュニティが崩

壊されているということも知ることが重要である。仮設住宅の設計からその後のコミュニティ形成もあるということを知るようにすることが重要である。現状では、その事実をどこを見ればいいのか難しい。

【南委員長】

- 知見はすべて蓄積されているので整理すれば可能だと思うが、10年ぐらいかかってしまうのではないかな。

【工藤委員】

- 「個性」と「しなやかな対応」の内容が想像できないのではないかな。

【草野委員】

- 客観的事実のアーカイブとしては6つのポイントはクリエイティブっぽくて迷ってしまう。「結いの力」ではなく「コミュニティ」や「行政」、「国」、「県」、「市町村」の方が分かりやすい。

【齊藤委員】

- 範囲が広すぎるような気がする。見る方が迷ってしまう。

【南委員長】

- 復興計画的なメニュー作りというよりも、入りやすさを意図したようなカテゴリを用意するかどうかはどうだろうか。

【工藤委員】

- 今回のように6つに分けて、さらに具体的なサブカテゴリがプルダウンで見えて、そこから選択ができるという中間のようなものがあると分かりやすいかもしれない。あまりにもデータの範囲が広いためにまとめるのが難しい。ユーザー視点からするとサブカテゴリがあると使いやすい。

【柴山委員】

- 何がこの中にあるのかということをどこかで示さないと入りにくい。

【草野委員】

- パッと見たイメージでバラ色のアーカイブシステムと思われたら困る。プランニングに走ると誤解されることもあるかもしれない。

【南委員長】

- 小学生や教員などユーザーサイドによって分けるというのはどうだろうか。

【工藤委員】

- オープンデータとして公開できるとよい。利用者がそれぞれ判断するための器としてデータベースを作るのが望ましい。

【草野委員】

- 次の備えに「備える人」がターゲット。例えば教育委員会が資料を基に小学生に向けて分かりやすい言葉でマップを作っていく、そのために使ってくださいということ。

【南委員長】

- 有用性を高めるための努力は今後いろいろな人が行うと思うが、それを現在アーカイブシステムに載せることは難しい。いいことも失敗事例もいろいろな事実を入れておいて、そこからデータを使って有用な情報を作ってくださいということ。やはり、入り口の段階でカテゴリ化は必要。さらに網羅的に検索ができることも大切。
- 復興計画や総合計画など、県民がコミットしやすいフレーム・カテゴリ化の枠組みがあった方がいい

いのかもしれない。いろんな場で議論した結果、蓄積されてきた復興計画の大きなフレームを利用するのも大切かもしれない。

【工藤委員】

- 各市町村でも切り分けて見られるようにというのは大事。このアーカイブシステムがあるならば、各市町村で作らず全部集合体にすればいいのと思うが、すでに作り始めている自治体もあるので、そこと上手にリンクできるようになるといい。

【南委員長】

- 市町村との連携はどのようになっているのか説明いただきたい。

【村上復興推進課主事】

- 先行して久慈・野田・普代が震災アーカイブを作っており、そちらとはシステム上の連携をして、岩手県のアーカイブでも検索はできるようにする予定。

【草野委員】

- 沿岸 12 市町村、全部とリンクできるといい。

【平野復興推進課主任】

- 市町村名で検索するとでてくるようなシステムになる。

【柴山委員】

○ すでに始まっている震災アーカイブ事業に対しては、そのシステムを参照するような形で「重ねない」ようにする。重ねないにしても横串ができることが必要である。

【工藤委員】

- 復興計画はどこに入るのか。

【柴山委員】

- しなやかな対応に入ると思う。「しなやか」とは誰から見てしなやかなのか、という議論を呼ぶ可能性はある。受け取り方は個人によって変わってきてしまう。被災者の立場から見ると、本当にしなやかな対応だったのかという話になるかもしれない。
- ガイドラインであったが、アーカイブをゲートウェイとしてここから地域に行ってもらおうという意味もあるので、「ふるさといわて」だけではなくて直接現地に行ってお勉強してもらおうという役割も必要。

【草野委員】

- 宮城県はアーカイブを作っているのか。

【柴山委員】

- 宮城県のアーカイブは出来上がっているが、カテゴリ化がされていないので資料の羅列が基本になっている。

【工藤委員】

- 人が写っている写真は大変だと思う。

【柴山委員】

- 笑顔の写真などは使えないというのがアーカイブの問題点。どのアーカイブに関しても肖像権の問題があるので基本的にNG。子どもたちの笑顔はとてもいいものだが、そういったものが載らない。このあたりも段階的に10年後、20年後に公開できるといったことを考えていかないと、死蔵されたアーカイブということになってしまう。

【草野委員】

- 一級品の資料というものはたくさんあるがメディアでは使えない。そういうものは記録集として残すしかない。

【南委員長】

- たくさん意見をいただいたがまとめると、訴求ポイントについては言葉の前向きな印象が強すぎるという懸念があるため、言葉の見直しが必要だろう。プラスのこともマイナスのことも、反省点・失敗事例を含めて検索できるようにしていく。
- 分類については肯定的な意見が多かった。何らかのカテゴライズは必要で、入口はユーザーが使いやすいものにしていきたいという共通認識があった。
- 時間軸については結論が難しそうだが、ほかのところも調べていただき、防災・復興のプロセスの中で全体に基調となる時間の切り方がないかを確認して、そこに沿わせていった方がいろいろな方が見るときに参考にしやすい、比較対象がしやすいという重要な指摘があった。
- 有用性を重視するために、それに必要なデータを新たに作る観点は時間をかけて考えていく。まずはカテゴライズはするが事実をある意味網羅的に、色をつけず突っ込んでいくということ。利用するサイドがいろいろなケースを引っ張り出して、その人にとっての有用な資料を作成していくのがいいだろうという共通認識があった。
- いいことばかりではなく、辛いことも恐れず載せなければならない。
- システム名称について、方向づけができるようご意見いただきたい。

【草野委員】

- 「リアス」というのはあり得ない。宮古を起点にして南側がリアスだが、北は隆起地層なのでリアスといわない。全県に広がるアーカイブ事業だとすれば、琥珀も久慈に偏ってしまう。むしろ「やませ」とかそういったものにしないと広がりがない。「琥珀のそら」のように明るくしても仕方がない。

【南委員長】

- 地域的な広がりのあるネーミングということですね。

【柴山委員】

- 補足として、今まで何十という震災アーカイブがあるがほとんどが震災アーカイブという名称ばかり。英語名にしたときに検索にひっかからない。さらに、検索してもトップに出てこないという問題もある。特徴的な名称にしないと、一般名称のほかのものが引っかかってしまうので気を付けないといけない。「ひなぎく」は花が出てきてしまうので、どれなんだろうとなってしまう。宮城県多賀城市のたがじょう見聞憶は造語であり、ひとつしかない名前なので、ほかのものは引っかからない。早く決めないとサイトの色合いやサイトイメージなど全体のシステム設計に関わってくると聞いたので、議論を先延ばしにすることは難しい。

【草野委員】

- 検索率向上を目指すのか、個性を重視するのかという視点を検討しなければならない。

【南委員長】

- 原案を事務局にご提案いただく。岩手という言葉は入らないほうがいいだろうか。公募をかけるというものもやめた方がいいか。メジャーな言葉より、少し考えたキーワードで皆さんに受け入れてもらうようなものが良さそうだ。

【草野委員】

- 造語で作ると覚えてもらうまで検索にいかないということもある。ある程度、ほかのアーカイブが出てきても、そこから引っ張ってこれるので、岩手の特色をきちんと出さなくてはいけない。

【工藤委員】

- 検索だけで考えると、「東日本大震災 岩手 アーカイブ」で検索が上がってくるような仕組みにすればいい。検索する人は名称を知らず、「岩手県の震災のアーカイブを調べたい」となるので、その検索でうまく上がってくるようにするのが良いと思う。

【柴山委員】

- その検索だと現在、久慈・野田・普代の震災アーカイブがでてくる。作られてから年数がたっているので、検索としては久慈・野田・普代の震災アーカイブがトップに出ると思う。あとはアーカイブという言葉が専門的用語なので、一般の人に分かるかなというところがちょっとだけある。

【齊藤委員】

- 最近使っていない言葉では、津波のことを「海嘯(かいしょう)」という。こういうものを入れると特徴的なものになるのではないか。

【南委員長】

- 「防浪堤(ぼうろうてい)」とかもある。

【草野委員】

- あとは作ってから認知してもらうまでどれだけPRするかが大事。

【工藤委員】

- ネットで「岩手 アーカイブ 震災」と検索してみたところ、「岩手県震災津波関連資料の収集・デジタル化並びにデジタルアーカイブ構築についての募集要項」が検索結果の一番上に出てきた。この用語さえあれば、検索としてはきちんと対応すれば上位に上がってくるだろう。

(3) 今後のスケジュールについて

【平野復興推進課主任】

- 今後のスケジュールについて、資料3をもとに説明。第3回有識者会議は、第2回で議論がまとまらない場合に開催(予備)とする。また、システムの名称案についてご提言をお願いします。

【南委員長】

- タイトなスケジュールだが、大きな意義をもつアーカイブ。ワーキンググループを立ち上げながら、詳細な議論をそこで進めていくプランを立てている。皆さまにもご意見をいただく機会があると思うが、タイトなスケジュールをご理解いただき、ご協力をお願いしたい。

【工藤委員】

- ワーキンググループは県および市町村の実務担当者の構成に、プラス有識者会議の担当者が参加するイメージか。

【平野復興推進課主任】

- ワーキンググループは実務担当者だけで構成する予定。

5 閉会

【小野寺復興推進課特命課長】

- 貴重なご意見ありがとうございました。いただいたご意見を基にワーキンググループで検討を進めます。検討の過程において委員の皆さまにご意見をいただきたいので、その際にご協力をお願いしたい。ワーキンググループの議論を踏まえて、次回の有識者会議の中で報告したいのでよろしくお願い致します。本日はありがとうございました。